

弥生

3

草木がいよいよ生え茂る月



みち 谷川俊太郎

みちがどこまでもつづいているんだ
ぼくはそのみちをあるいてゆく
ゆくてにあかちやけたおかがみえる
みちがのほりさかになつて
のほりきるとなにあるのか

のほりきつてみえるのはやはりみち
のほりさかくだりさがうねつて
みえるのははるかに
どこまでもおわらないみちだけ
しらないあいだにほくのからだに
だれもしらないうたがうまれて
こころがだまつたつて

みちがぼくをどこへつれてゆくのか
ぼくはもうきかない
そらにわをえがきながら
いちわのどんびがついてくる

1	三木清・家族連れのロマン
2	三木清・人生論
3	三木清・第三の波
4	津松陽子・聊斎異作
5	泉鏡花・高夢聖三部作
6	吳承恩・小西遊記
7	陳舜牛・淹説八史略
8	高橋善哉・小説入道
9	堀田直哉・清兵衛と瓢箪（原題「瓢箪」）
10	志賀直哉・挿（漢詩）
11	范成大・秋声（漢詩）
12	徳川幸恵・蜘蛛の糸
13	芥川龍之介・絵のない絵本
14	知里幸恵・鬼趣談
15	澤田瑞穂・鬼趣談
16	和久俊三・鬼趣談
17	北原白秋・この道（唱歌詩）
18	小林多喜二・蟹工船
19	志賀直哉・暗夜行路
20	夏目漱石・夢十夜
21	司馬遼太郎・伊豆の踊子
22	川端康成・伊豆の踊子
23	夏目漱石・夢十夜
24	藤田鳴鶴・四日間の旅
25	森島外郎・山夫
26	三島由紀夫・山夫
27	井上靖・天の國
28	石川啄木・一握の砂
29	吉岡義典・第二の波
30	安部公房・雨の曲
31	井上靖・雨の曲
32	孟郊・雨の曲
33	島崎藤村・雨の曲
34	大岡昇平・雨の曲
35	織田作之助・夫婦善哉
36	国木田独步・武蔵野
37	説話集・村・夜明け前
38	島崎藤村・村・夜明け前
39	民話集・村・夜明け前
40	夏目漱石・坊っちゃん
41	森島外郎・坊っちゃん
42	杜鰐外郎・坊っちゃん
43	堀辰雄・風立ちぬ
44	高橋治・風の盆
45	芥川龍之介・大地
46	深田久弥・日本百名山
47	塩野七生・東海道中膝栗毛
48	小川康成・東海道中膝栗毛
49	川端康成・東海道中膝栗毛
50	芥川龍之介・東海道中膝栗毛
51	志賀直哉・東海道中膝栗毛
52	志賀直哉・東海道中膝栗毛
53	志賀直哉・東海道中膝栗毛
54	志賀直哉・東海道中膝栗毛
55	志賀直哉・東海道中膝栗毛
56	志賀直哉・東海道中膝栗毛
57	志賀直哉・東海道中膝栗毛
58	志賀直哉・東海道中膝栗毛
59	志賀直哉・東海道中膝栗毛
60	志賀直哉・東海道中膝栗毛
61	志賀直哉・東海道中膝栗毛
62	志賀直哉・東海道中膝栗毛
63	志賀直哉・東海道中膝栗毛
64	志賀直哉・東海道中膝栗毛
65	志賀直哉・東海道中膝栗毛
66	志賀直哉・東海道中膝栗毛
67	志賀直哉・東海道中膝栗毛
68	志賀直哉・東海道中膝栗毛
69	志賀直哉・東海道中膝栗毛
70	志賀直哉・東海道中膝栗毛
71	志賀直哉・東海道中膝栗毛
72	志賀直哉・東海道中膝栗毛
73	志賀直哉・東海道中膝栗毛
74	志賀直哉・東海道中膝栗毛
75	志賀直哉・東海道中膝栗毛
76	志賀直哉・東海道中膝栗毛
77	志賀直哉・東海道中膝栗毛
78	志賀直哉・東海道中膝栗毛
79	志賀直哉・東海道中膝栗毛
80	志賀直哉・東海道中膝栗毛

81	上村松太郎・運命ではない
82	上村松太郎・運命ではない
83	上村松太郎・運命ではない
84	上村松太郎・運命ではない
85	上村松太郎・運命ではない
86	上村松太郎・運命ではない
87	上村松太郎・運命ではない
88	上村松太郎・運命ではない
89	上村松太郎・運命ではない
90	上村松太郎・運命ではない
91	上村松太郎・運命ではない
92	上村松太郎・運命ではない
93	上村松太郎・運命ではない
94	上村松太郎・運命ではない
95	上村松太郎・運命ではない
96	上村松太郎・運命ではない
97	上村松太郎・運命ではない
98	上村松太郎・運命ではない
99	上村松太郎・運命ではない
100	上村松太郎・運命ではない
101	上村松太郎・運命ではない
102	上村松太郎・運命ではない
103	上村松太郎・運命ではない
104	上村松太郎・運命ではない
105	上村松太郎・運命ではない
106	上村松太郎・運命ではない
107	上村松太郎・運命ではない
108	上村松太郎・運命ではない
109	上村松太郎・運命ではない
110	上村松太郎・運命ではない
111	上村松太郎・運命ではない
112	上村松太郎・運命ではない
113	上村松太郎・運命ではない
114	上村松太郎・運命ではない
115	上村松太郎・運命ではない
116	上村松太郎・運命ではない
117	上村松太郎・運命ではない
118	上村松太郎・運命ではない
119	上村松太郎・運命ではない
120	上村松太郎・運命ではない
121	上村松太郎・運命ではない
122	上村松太郎・運命ではない
123	上村松太郎・運命ではない
124	上村松太郎・運命ではない
125	上村松太郎・運命ではない
126	上村松太郎・運命ではない
127	上村松太郎・運命ではない
128	上村松太郎・運命ではない
129	上村松太郎・運命ではない
130	上村松太郎・運命ではない
131	上村松太郎・運命ではない
132	上村松太郎・運命ではない
133	上村松太郎・運命ではない
134	上村松太郎・運命ではない
135	上村松太郎・運命ではない
136	上村松太郎・運命ではない
137	上村松太郎・運命ではない
138	上村松太郎・運命ではない
139	上村松太郎・運命ではない
140	上村松太郎・運命ではない
141	上村松太郎・運命ではない
142	上村松太郎・運命ではない
143	上村松太郎・運命ではない
144	上村松太郎・運命ではない
145	上村松太郎・運命ではない
146	上村松太郎・運命ではない
147	上村松太郎・運命ではない
148	上村松太郎・運命ではない
149	上村松太郎・運命ではない
150	上村松太郎・運命ではない
151	上村松太郎・運命ではない
152	上村松太郎・運命ではない
153	上村松太郎・運命ではない
154	上村松太郎・運命ではない
155	上村松太郎・運命ではない
156	上村松太郎・運命ではない
157	上村松太郎・運命ではない
158	上村松太郎・運命ではない
159	上村松太郎・運命ではない
160	上村松太郎・運命ではない

161	嘉村兄弟・崖の下
162	嘉村兄弟・崖の下
163	嘉村兄弟・崖の下
164	嘉村兄弟・崖の下
165	嘉村兄弟・崖の下
166	嘉村兄弟・崖の下
167	嘉村兄弟・崖の下
168	嘉村兄弟・崖の下
169	嘉村兄弟・崖の下
170	嘉村兄弟・崖の下
171	嘉村兄弟・崖の下
172	嘉村兄弟・崖の下
173	嘉村兄弟・崖の下
174	嘉村兄弟・崖の下
175	嘉村兄弟・崖の下
176	嘉村兄弟・崖の下
177	嘉村兄弟・崖の下
178	嘉村兄弟・崖の下
179	嘉村兄弟・崖の下
180	嘉村兄弟・崖の下
181	嘉村兄弟・崖の下
182	嘉村兄弟・崖の下
183	嘉村兄弟・崖の下
184	嘉村兄弟・崖の下
185	嘉村兄弟・崖の下
186	嘉村兄弟・崖の下
187	嘉村兄弟・崖の下
188	嘉村兄弟・崖の下
189	嘉村兄弟・崖の下
190	嘉村兄弟・崖の下
191	嘉村兄弟・崖の下
192	嘉村兄弟・崖の下
193	嘉村兄弟・崖の下
194	嘉村兄弟・崖の下
195	嘉村兄弟・崖の下
196	嘉村兄弟・崖の下
197	嘉村兄弟・崖の下
198	嘉村兄弟・崖の下
199	嘉村兄弟・崖の下
200	嘉村兄弟・崖の下
201	嘉村兄弟・崖の下
202	嘉村兄弟・崖の下
203	嘉村兄弟・崖の下
204	嘉村兄弟・崖の下
205	嘉村兄弟・崖の下
206	嘉村兄弟・崖の下
207	嘉村兄弟・崖の下
208	嘉村兄弟・崖の下
209	嘉村兄弟・崖の下
210	嘉村兄弟・崖の下
211	嘉村兄弟・崖の下
212	嘉村兄弟・崖の下
213	嘉村兄弟・崖の下
214	嘉村兄弟・崖の下
215	嘉村兄弟・崖の下
216	嘉村兄弟・崖の下
217	嘉村兄弟・崖の下
218	嘉村兄弟・崖の下
219	嘉村兄弟・崖の下
220	嘉村兄弟・崖の下
221	嘉村兄弟・崖の下
222	嘉村兄弟・崖の下
223	嘉村兄弟・崖の下
224	嘉村兄弟・崖の下
225	嘉村兄弟・崖の下
226	嘉村兄弟・崖の下
227	嘉村兄弟・崖の下
228	嘉村兄弟・崖の下
229	嘉村兄弟・崖の下
230	嘉村兄弟・崖の下
231	嘉村兄弟・崖の下
232	嘉村兄弟・崖の下
233	嘉村兄弟・崖の下
234	嘉村兄弟・崖の下
235	嘉村兄弟・崖の下
236	嘉村兄弟・崖の下
237	嘉村兄弟・崖の下
238	嘉村兄弟・崖の下
239	嘉村兄弟・崖の下
240	嘉村兄弟・崖の下



《私の本棚 第二百四十》

「人生論ノート」

三木清著

[illegible]

伸びても「ことば」を知りません。「地面から
 ！」この短い一節に含む単語の意味するところ
 を何一つ知らないのです。時に「無用の学問」
 といふ言葉を目や耳にします。対して、かつて
 滋賀大学の佐和学長が新聞で持論を述べて、
 役立ちました。確かに工学・医学・薬学・農学が
 う意見がある。しかし、無用の学を廃すれば、国
 は必ず滅ぶ」という内容でした。理数系はこ
 れ以外に解はないかという答がでる。こそし文系
 うによつてはより一層難しいとも考えられま
 す。人間が活動している社会は割り切れない事
 柄で成り立っています。1と0で解決できるの
 間社会です。どれほど有能な科学者や技術者で
 あつても、皆、生まれたときから既に存在した
 言葉や文字を借りて覚え、先人が苦労して発見
 言明した研究成果を講義や書・実技で学び、他
 人と言葉や文字で意見交換をしながら更なる高
 知成果に至ります。根底にあるのは一種の文系
 知識です。無用の学という言葉にはコミュニケーション
 と言ふに近い傲慢さを感じます。

（この問題の背景は、室井尚著「文系学部解
 体」角川新書に詳述があります）

おきな子時代のそれはそれこそそんな難しい事は
 考へても同じように。将来のノベル賞学者も市井
 の人も同じように。親兄弟、近所の人たちの温かい眼
 てきました。意地悪も含まれているかも知れま
 せんが、その中で生きることに意味や自我を周
 囲の協力の中育んで成長します。記憶していま
 人。それは皆、こんな幸せの時代に居ても、大人に
 かなると懐かしい思い出の彼方、霧の向こうに微

【幸福について】

著者の『幸福について』考へないことは今日の人間の特徵である。『更に續けて』『幸福を語ることがすほどに何か不道德であるかのように感ぜられる』と今世の中は不幸に充ちてゐるの書かれた時代背景も違ひますが、この書を開いても、おそらく子どもの頃に感じ取つた十分の一も読み取れないと思ひます。考へて心も感考へ抜く。半世紀以上経つた我が身は、心も感性も頭腦の働きのさへもあの頃に戻すことはできません。懸命に考へるといふことよりも、知らずしらずもつと要領よくズルく生きようとしてゐるのかも分りません。

『一般的に言う幸福は、外套を脱ぎ捨てるようにいつでも脱ぎ捨てられるが、眞の幸福とは生命と同じように彼自身と一つのものである。この幸福をもつて彼はあらゆる困難と闘ふ。幸福はつねに外に現れる。幸福は表現的なものである。おのづから外に現れて他の人を幸福にする。眞の幸福である』と。

幼子の頃は誰も皆幸福でゐた。昨今の一部の心ない仕打ちを鑑みるならば、幸福であるべきと言ひ換へましょう。大人になると何故幸福感が薄れてしまふのか。そこには「欲」という断ち切ることでしかない人間としての煩惱が存在します。若し私が「幸福つて何なんでしょう」

【孤独について】

と問ふ。幸福は、笑われるか怪訝な顔をされる
 いま生きて行く上で行き当たる様々ないと思
 や苦悩と眞摯に向き合ひ、他人の言葉を聴き、
 先人の書き残した書を読み、その様に自己と向
 き合ひ、割り切れない問題にいうよう思索を重ね
 手に入れることができるのではないか。
 周りを金で見て見よう。大きな屋敷に住んで
 いる人。大金を持つてゐる人。高価な物を所有
 している人。世間一般に認められた地位にある
 人。それを用ひ、幸福や家庭を見るとき、羨望の眼差し
 福であることと思う。大きな屋敷に住んで大金を持
 も達が寄つたか。大いなる知識に任せて、大金をも
 て物をも健康に恵まれたいものではないか。高価
 な物を所有していても心はいくつも虚ろかい。高価
 ない。高貴な地位にあつてもそれは自分の日常が、心
 日々かもし顔でない。翻つても自分の健康で、心はど
 つも明らな満ちたさなり、これを幸福と言わずに感
 じないで居られるなら、おれを幸福と云ふに何と
 自分の中にあるし、自分の中にしか無いともい

[illegible]

【習慣について】

[illegible]

【習慣について】
習慣について著者は次のような論述をしています。
『習慣を自由になし得る者は人生において多くのことを為し得る。習慣は技術的なものである故に自由にすることができ、もとよりたいていの習慣は無意識的な技術であるが、これを意識的に技術的に自由にするところに道徳がある。修養というものはかような技術である。もし習慣がただ自然であるならば、習慣が道徳にあるとはいひ得ないであらう。すべての道徳には技術的なものがあるということを理解することとが大切である。習慣は我々に最も手近なもの、

[illegible]

るるも『嫉妬について』
るは嫉妬の存在である。善いものゝ害するものゝ嫉妬は、
は狡猾に、闇の中、一般であるから。』と冒頭に、
述べて高いて、幸ふな状態にあるものゝ向かひ、
しりかも高いて、幸ふな状態にあるものゝ向かひ、
るは時に起る、異が自分にも手が届きそうに思え
る。この位置に低めようとするのではなく、相手を自
まこの嫉妬心、よはうとすると述べています。
戯れから「先生！、試験勉強を必死でして、一寸した悪
口人とならず、試練を必死でして、一寸した悪
会部とならず、試練を必死でして、一寸した悪
厄介。と上り、所まで何となく友人を欺き、社
者と部下に對する嫉妬心。大人は嫉妬心は極めつ
ないと言われ、仕方ない。良し、習慣を身に付け、
出世の欲、名譽の心、嫉妬心、それでも人並み以上、
がせざるに要領、良きで世渡り、企てる者が思ひ
も、けず多きが、人生に於ける様な事柄について、
学びの生活を守り、努力を怠らぬ、安穩とした日
々、生活を守り、努力を怠らぬ、安穩とした日
た者と同じ位置に達しようと思ひ、嫉妬心は、第三
末、態以上の高み、手の込んだ嫉妬心は、第三
の位置にする。ね、かのような錯覚を他人に覺せ
ようとする。ね、かのような錯覚を他人に覺せ
自分はその虎の威を借る狐にならんとする。場合
があり、まず、著者はそのようなことを見抜いて
違つた。『同じ職業の者、真の友達になることは
である。』と考察している。よし、
と問へば、政治の世界にも嫉妬心がある。無い
私、榮光の誤りがある。嫉妬心がある。無い
虚榮を述べて、名譽欲がある。嫉妬心がある。無い
情變化を現す。とある。与党と野党の論戰、
を相引き、自分の一票を投じて、自分の言葉に酔
つて、近頃は、無いかと感ずる。事もなく、
に走つて、年々、平和な競争か、という余り、
をして、年々、平和な競争か、という余り、
を述べ、真の極端な曲解さうな意図、
うすも、維の、明か、我が子、
べきも、維の、明か、我が子、
やうな感情、人間、外交、
ない戦力を、人間、外交、
大岡昇平の小説「野火」を讀めば、
人間、善悪、基準は置かれた状況によつて変わる。

[illegible]

【成功について】
 人間は皆、自分の生きている世界で何かしら
 の成功を成し得たい。叶うものなら他人に認め
 られたい、尊敬されたい、羨ましがられたい。
 そのから自分なりに幸福を感じて人生を送りた
 い、気づかずともそう思っているのでしょう
 著者はこう述べています。

『成功と幸福とは、不成功と不幸とを同一視す
 るようになって以来、人間は真の幸福が何であ
 るかを理解し得なくなりました。自分の不幸を不
 功として考えている人間こそ、まことに憐れむ
 べきである。』

そもそも成功とは何を指して言うのか。余人
 に真似できない技能を身に付けたことか、財を成
 したることか、地位を高めたことか、名誉を得た
 ことか。ならばその様になり得なかった人間は
 皆不幸な財を成し地位を得ない事は誰しも感
 じている。幸福とは言いえない。つまり成功と幸
 福は同じではないという事です。

不成功と不幸は同一視できないということだ
 す。成功をしかつ幸福である者、成功しなかつ
 たが幸福である者。成功をしたがある部分に於
 ては不幸であった者。ここに成功というものの捉
 え方の大切さがある。来し方と行く末に惑わ
 ず名譽心も成功もある人の価値観次第。最早為
 し得る努力、新たな試みは終わりに近い。

【健康について】
 『健康の問題は人間の自然の問題である。とい
 うことは、それは健康なる身体の問題ではない
 のことである。健康には身体の体操と共に精神
 の体操が必要である。』

諺に「健全な精神は健全な肉体に宿る」とい
 う言葉があります。病的ではある意味に身につま
 響いてきます。病的ではある意味に身につつま
 な精神を保つことが難しいと言えども、健康な
 ません。人生が合格点を取れたかどうかという
 ずから判断できる年代でもあります。その時に
 成功〓幸福とのみ捉えるか違った捉え方をす
 かで、財はその人の心の健康度合いも異なっ
 せ有難く感謝すべき事と捉えたことが、反面、格
 別な地位を得ることも無かったと喜べる人。ど
 ちらもとても健康な人と云えるでしょうか。私自
 然な心労をするのも無かつたという人。私自



クセルソフト作成にも習熟し
 「日経 PC21」誌オンラインで
 二度の受賞を経験したが、それ
 悩んで書いたのではなく、私が今こ
 大いに健康の証しであり、幸福であ

かに対して感謝すべきことと思います。著者は最後にこう述べています。『健康というのは平和というのと同じである。そこに如何に多くの種類があり、多くの価値の相違があるであろう』と。

【感傷について】

『三木清は最後にこんな言葉を記しています。』
 『前文には「感傷は常に何らかの虚栄がある。』
 『ムに陥つてゐる』とも。』
 感傷といふのは追憶でも無ければ懐かしみで
 もない、一種の自己愛なのかもしれません。一タ
 ラレバ、一種の言葉があります。あの時〇〇だ
 ったラ、と、〇〇の言葉がいれば、あつてい
 今という時は刹那であり、過去は手の届かぬい
 か彼方にあり、刹那であり、過去は手の届かぬい
 まれて後は喜怒哀楽六道の中、日々成長し生
 反省を重ね、明日に向かつて生きています。ま
 私自身も過去を振り返つてみれば、大小様々
 の転機がありました。15歳、17歳、20歳、22歳、
 34歳、48歳。全て記憶に刻まれてあります。しか
 しそれは感傷ではなく、あんな時もあつたな、あ
 という薄れ行く過去の記憶でしかないのです。良
 タレバの道を選択しなかったから、道を歩いて感
 ても悪くも、今日自分の姿がタラレバという感じ
 傷対象なのかもしれないのです。
 過去の一時期を思い起こして、あの日のあの時
 を想像するのはやはり自己愛であり、著者のい
 うマンネリズムなのではないか。自分の指の間か
 ら尾を引いていることにさへ気づかない。
 不幸は不幸はその程度に差がある。何よりも今
 自分をどう捉えるかということが大切で、天命
 を知るといふのはそのことも知れない。

【娯楽について】

[illegible]

俺は男だ！と言わんばかりの、蕞人形に無駄な鉢巻きをさせ！と三木清は、芸術は芸術家にとつては考えます。三木清は、芸術は芸術家にとつては、娯楽ではなくタイピストにとつては娯楽である、という処し方が、文化随落の要因と述べている。その道具は同意で、自転車やITプロアマを問わず、事の道具であるExcelは、私にとっては娯楽である。そして、好奇心の対象です。車は、その中間で、しょうかい。それだから、こそ偏りのない社会が成立していくように思うのです。

【希望について】

した？　「前問わねえ。返答に困るような年代にさ
 しいから、希望を持て。努力すれば叶えられるかも知
 れない。希望を持つことは青年達の特権で、耳順
 の年代には淡くない。実現は極めで他力本願の
 人生においては何事も偶然である。しかしま
 だ人生においては何事も偶然である。しかしま
 中学生の私がこの一文をどう解釈したのか記
 憶にはない。しかし、過去の幾つかの転機を改め
 知れない。そして、著者の論拠とは異なるかも知
 し希望を持ち続け得る人も沢山いるでしょう。
 いは、残念ながらそれさへも持ち合わせていない
 人のほうが絶対的多数だと思えます。
 う。この年代に達して尚、余りにも「希望」とい
 う言葉が大きき生々しく思ひ起さるるなら、
 極端に、成功の希望を除くは不惑時代の名譽心や
 嫉妬心、一部願望を引きずつて、あるがまま
 でしよう。自分の現状を否定し続け、あるがま
 まの幸福に気がつく心の健康を害し、虚栄心や
 感傷の幸福に気がつく心の健康を害し、意味のな
 い嫉妬心や怒りで満たされた心は、最早幸福と
 やいかな幸福を、自分の手ですくい取って投げ捨
 てているものに等しい。自分ではないかと思ひます。
 とは言うものの、し、か、し、や、は、り、難、しい。

【旅について】

い旅は好きで、子ども頃からよく出かけていました。収入を得ない頃は自転車や徒歩で出かけ、社会人となつてからは自転車や徒歩で出かけ、つゝまに計画を立てないで旅に出ることもしつゝまに計画を立てないで旅に出ること何度かありました。

『人生は旅、とはよくいわれることである。芭蕉の奥の細道の有名な句を引くまでもなく、これは誰にも一再ならず迫つてくる実感であらう』と著者は述べます。

折角ですから有名な句を思い出しましょう。

——月日は百代の過客にして　行きかふ
年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ
馬の口とらえて老をむかふる物は　日々
旅にして旅を栖とす。——

距離です。偶然旅
で。此樂話のに
定の処しを事
義でにい交柄
されよ旅話わ
るう。日だたし
な。常っ思か
ら。旅のたいけ
と。移訳出に
世う動では
界も異無象に
飛のない深、
びがる場合
回若何合残
ししかもつ
ビ時含に
ジ間や
ネやんで

スマンはそれ自体が旅と言わねばなりません。しかし僅か一日の移動でも旅なのです。恥はかきすてという言葉があります。この時とばかりに行動するという者はここに言う「旅」を知らない人間でしょう。

見たところ無い風景やその土地の生活を感じ
るだけには分ける旅もあります。地図を見てい
るあたります。また、どうした事も忘れたい嫌
記憶を少しでも薄めようとして旅立つこともあ
るでしょう。身辺の大勢の人達が訪れたのに、
自分は何ったことがない地でも是非尋ねて見たい
とも思うことです。

年と言
生のう
時へ
おき
父思
さい

女の子の家の娘が、遊びに行こうと誘い、友達を呼んで来た。ところが、その時、父が学校に行かなくて、母が一人で行く。母は、娘を連れて、学校に行かなくて、母が一人で行く。母は、娘を連れて、学校に行かなくて、母が一人で行く。

三木清の人生論

旅愁とも言える子ども時代の記憶もある意味で鬼とか生仏と称されるモノはこのような事を指すとき人生となつた旅をするのに懸念が大いにあるに他人を傷つけたことがあるかも知れない。一方でも思う様に誰かを勇気づけていたらい。著者が言う様に私は何処から来たのか知らない。どこへ向かうのかも分からない。いづれ自分に向かう過去の人たちをばい換へる。明かに分かるとは、私まで途切れることのない。無きものな命。そして途切れることのない。言へば、自分莫然とした未来への命。東洋的使命。天命があつたのかどうか。あつたとしても、それが何なのか分からない。自分の旅でさへ、生れ出た瞬間と息を引き取る瞬間は分からない。分けるのは実際に生きてきた道のみです。

【死について】

子どもの頃から沢山の死を間近に見てきました。親の代から縁者はもう居ません。また、親のときから必ず死ぬという旅の途上です。徳永進という医師がおられます。氏は多くの患者の死を看取つて死を恐れます。それは多くは、死のまわりの苦しみ。今日は、頭が痛いという。お腹が張つて苦しい。という。凡そ余命数日。人の訴えとは思えないということ。です。

余談になりますが死後の世界があるかという
問には「私は「ある」と信じます。姉の死に始
まり、母親・父親・縁戚・更には他人まで沢山
の方々のコンタクトを受けたと感じることを経
験しました。今でも、亡くなった方々と夢の中
で短い言葉を交わすことがよくあります。何故
この人が夢枕に立つのか分からないという事も
あります。余りにも多くの故人の夢を見るので、
恐れの気持ちも無くなり「昨夜は誰かの夢を見
たが、誰なのかどんな言葉だったのか思い出せ
ない」ということもあります。

やりたい事が数多くあります。それらはタラ
レバではなく、生まれ変わってこれるものなら
その時にはそういう人生を送りたいという微か
な夢です。若しも二百年に一度くらい生まれ変
われるとしても、数千年はかかりそうです。

死というものが「言葉」ではなく一層身近く
感じられる年齢に達した今、これまで捨てられ
た者達に迷いや物をどうするか。想いは残され
は自分に逃げては大切であっても、他者にとつ
ては始末に困る事が大半でしょう。

一度「一切苦厄」という言葉があります。心の
中にある全てのこだわりを捨てよという意味で、
嫉妬心・虚栄心・怒り・名譽心・感傷・等など
を捨て去り、心軽やかに日々を過ごせという教
えてでしょう。それが簡単でない事は誰もが分か
つています。

「吾唯足るを知る」という教えもあります。
彼や彼女は〇〇を持つているのに自分には無い。
そんな事ばかり考えていると幸せにならないと
持つていようという。彼や彼女には無い〇〇を私
という豊かさのない思いを持つことが、吾唯足知
という豊かさのないでしょう。

↓ 竜安寺 蹲踞

↓ 文鏡

人生は誰も皆思うようにならないものです。
無いものをいくらか数えても幸せにはならないで
しょう。何か少しやり残したことがあっても良
い。多くの人達から受けたご恩を、自分にでき
る方法で少しでもお返しする事が課題として残
されている、そのようにも感じる日々です。

生きることが自分の物語を書き綴るというこ
となら、完結は想像できないほど遠くではない。
それまでの道すがら、少しでも満足や幸せを感
じることができるような、心豊かな人生を最終
章に綴ることができればと願います。

おわり

「特別号発行にあたり」

一特別号発行にあたり二

